

音声言語発信が困難な重度肢体不自由事例との 会話場面における話題の共有化過程の様相[†]

岡澤 慎一*
宇都宮大学教育学部*

重度肢体不自由を抱え、音声言語発信が困難な人と係わり手である筆者との会話場面を取り上げ、やりとりが展開する様相に関してトランスクリプトを作成し、話題ユニット、やりとりの内容、回数、話題始発の方向性、話題共有の可否について分析し、係わり手との間で話題が共有される過程の様相について検討した。その結果、話題ユニットは大きく2つに区分され、いずれも対象者から始発されたものであった。対象者から始発された話題により多くのやりとりを要し、係わり手から始発された話題については比較的速やかに次の話題に展開していた。ここから、対象者が、他者からの質問に対して応えることは比較的容易であるが、自分が考えている話題を他者に伝え、他者と共有することに困難を抱えていることが示された。また、やりとりの内容の分析から、対象者の始発／応答行動を文脈や周囲の環境との関連のなかで捉えること、自成信号を読み取ることの重要性が示唆された。最後に、係わり手のあり方とコミュニケーションにおける話題共有の意義について述べた。

キーワード： 重度肢体不自由 コミュニケーション 会話 話題の共有 事例研究

I 問題と目的

コミュニケーションには、コミュニケーション・システムによる伝達の側面と「気持ちの共有」、「感情の共有」という情動的あるいは「交流・共有」の側面とがある（細淵，1996；文部省，1992；土谷，2009）。また、コミュニケーションにおいては、様々な信号が取り交わされている。Wold（1999）は、コミュニケーションにおけるあらゆる方法は等しい価値を持つとして、コミュニケーション・サークルという考えを提示している。そこでは、筋の動き、味、書くこと、類似的記号、写真、図画、読唇、音声言語、音、アイ・コンタクト、手文字、手話、パントマイム、擬態・擬音、身振り、においなど様々なものがコミュニケーションにおいて信号になり得ることが示されている。さらに、梅津（1978）は、信号を大きく自成信号と構成信号とに区別している。自成信号とは、生活体が伝えるためにあえて作ったものではなく、ある環境状況において発現した行動が他の生活体に対して信号になるものを指し、視線

の動きや表情の変化、仕草などが含まれる。一方、構成信号とは、伝えるためにあえて作ったものが他の生活体に対して信号になるものを指す。コミュニケーションにおいて、生活体は、構成信号だけでなく自成信号を含んだ渾然一体とした信号の束を発信者から受信しているといえる。

コミュニケーションにおける信号のやりとりは、受信、発信という側面からとらえることができる。ここで障害を有する人のコミュニケーションについて考えると、発信は運動系によるものであるから、肢体不自由を抱える人のコミュニケーションは、ともすると受信に偏り、受け身になりやすい。また、発信においても、要求の伝達が重視され、情動や共有といった側面は相対的に軽視されがちといえる。

肢体不自由を抱える人とのコミュニケーションのうち、特に発信行動の形成に視点を置いた取り組みについて、木村（1973a，1973b）は、数名の重度脳性まひ児に対して、各々の個体に適した交信行動の形成を試みている。これは、重度脳性まひ事例に対して組織的、系統的な交信行動の形成を試みた研究としては須賀（1968）と並んで最も初期のものと思われる。元木（1992）は、情報発信手段の乏しい

[†] Shin-ichi OKAZAWA*: The aspects of sharing topics in the conversation between a man with profound physical disabilities who communicate in a nonverbal way and his partner.
* Faculty of Education, Utsunomiya University

脳性まひ児に、コミュニケーション手段を獲得させるための系統的、段階的な指導を試みた。その結果、ひらがな文字を習得し、情報発信手段として、ボインディング動作やトーキングエイドが使用できるようになり、また、情報発信に関する動因が高まり、能動的な行動の生起頻度が増加したことを報告している。

筆者が継続的に係わり合いを持っているYさんは、寝たきりで自力による移動が困難なほどの重度の肢体不自由を抱えている。音声言語による発信は困難であるが、個別に対応すれば日常会話の内容を概ね受信し、理解することができる。Yさんの発信内容は多岐にわたり、表すことがらとの類似性の高い写真や具体物などの象徴的な構成信号では対応しきれない。しかし、ことがらの細かな分化に対応し得るひらがな文字など分子合成的な構成信号（梅津、1978）による発信は、これまでその習得を試みつつも、非常に困難であり、Yさんとのコミュニケーションは、係わり手が音声言語で尋ね、Yさんが表情や身振り、種々の動作で応えることを繰り返すことによって行なわれる。一方、Yさんの生活全体に視点を向ければ、受け身で過ごすことが多く、自らの発信に基づいた活動が十分に展開することは少ないといえる。こうした状況のなか、筆者は、Yさんからの発信に基づいた会話を展開し、話題を共有することを重ねてきた。Yさんとの会話場面を詳細に検討することによって、重度肢体不自由を抱える人とのコミュニケーションのあり方を考えていく上での資料になると考えられる。

そこで本研究では、音声言語発信が困難な重度肢体不自由事例との会話場面を取り上げ、対象者から発せられた話題が係わり手との間で共有される過程の様相について検討する。

II 方法

1 手続き

重度の肢体不自由を抱え発信手段が著しく限られているものの、個別に対応すれば日常会話や状況の変化を概ね受信し、理解することが可能なYさん（以下「Y」と略記する）を対象事例とし、Yが生活する施設において、係わり手である筆者（以下「A」と略記する）との会話場面をビデオ映像に記録する。ビデオ映像記録から抽出したエピソードを基礎資料とし、会話場面におけるやりとりが展開する様相に

関してトランスクリプトを作成し、分析の資料とする。その際、話題ユニットおよび話題ユニットごとの時間経過、やりとりの内容、やりとりの回数、話題始発の方向性、話題共有の可否について分析する。

2 対象事例

Y、32歳の男性。医学的所見は、脳性まひ（アテトーゼ型）である。在宅で生活していたが、29歳のときに重症心身障害児病棟に入所する。日中は、車椅子上で過ごしていることが多い。全身に強いまひがある。寝たきりの状態であり、寝返ることはできるが、自力による移動は極めて困難である。不随意運動が強く出るものの、上肢の粗大な動きや頭部、上下腕の不随意運動を抑制した上での指先の細かな動きなどによるスイッチの入力操作が可能である。コミュニケーションについては、周囲からの音声言語による問いかけに対して、肯定の場合は、うなずく、視線を若干下に向ける、左上肢を挙げて「あーい」などと発声する、否定の場合は、視線あるいは顔をわずかに横に逸らす、静止するなどによって意思表示が可能である。Yから始発された話題に対して、Aが音声言語で尋ね、Yが応えるやりとりを重ねるなかで、例えば「今度の休みの日に外泊するかどうか知りたいので母親に電話して欲しい」といった話題内容が確定されて、要求を伝えることが可能である。話題を伝えることに際しては、例えば、施設外のことを伝えるために施設の玄関に視線を向けたり、次の訪問の日程を確認するためにカレンダーに視線を向けたりするなどのように、視界にある事物を視線で示すことができる。また、同じ施設で生活する人や職員の顔写真が複数枚提示され、Aが音声言語のみで名前を発して対応する写真を尋ねると視線で正確に示すことができる。しかし、会話において、Yが自発する話題内容は多岐にわたり、こうした写真や具体物などの象徴的な信号のみでは十分に対応しきれず、話題内容の確定には至らないことが多い。また、ことがらの細かな分化に対応し得るひらがな文字のような分子合成的の信号については、学校教育において取り組んできた経過があるものの、習得には至らず、意思表示には使えていない。

Aとは、Yの病棟への入所時から面識があり、その後、週に1回程度、Aが病棟を訪問する度に会話をするようになる。普段、自分の思いを十分に話せることは少ないものの、Aとの会話のときには、10

分から 30 分程度の時間を掛けて、ゆっくりとやりとりができる。

3 分析資料

ここで取り上げる会話場面は、以下のようなものである。時期は、Y と A が出会ってから、2 年 9 カ月が経過したときである。Y が生活する施設と一緒に散歩をしている。Y は車いすに乗っている。こうした状況において、Y が A に視線を向け、それに対して A が「何か話があるの」と尋ねると Y がうなづく。さらにやりとりを重ねると、Y が“どこかに出かけた”という話をしたいとのことであった。それを受けて一旦散歩を休止し、施設内のロビーにて、車いすに乗っている Y の正面で A が椅子に腰を掛けて会話を始める場面である。Y から見て、左側は、施設の外にある中庭が見えるような全面ガラス張りになっており、一方、右側前方には、施設の中央玄関がある。Y の後方 5 メートルほどには、Y の母親がいるが、知人と話をしており、Y と A との会話には参加していない。こうした状況における 17 分 20 秒間の映像資料である。

Ⅲ 結果と考察

1 トランスクリプトによる分析

Table1 は、会話場面のやりとりに関するトランスクリプトである。以下のトランスクリプトの記述に関して、例えば「I・1」の表記のうち、ローマ数字は話題ユニットの上位区分、ハイフン以降の数字は下位区分を示し、他もすべて同様である。カッコ（ ）の数字は、やりとりの内容番号を示す。やりとりの内容の冒頭の Y あるいは A は、直後の行為あるいは発話の主格であることを示す。また、／○○○／は身振りあるいは身体の動き、「○○○」は音声言語、「／○○○／」は音声言語に身振りあるいは身体の動きが重ねられていることを示す。

Table1 を見ると、話題ユニットは、大きく 2 つに区分され、さらに各々が 6 つずつに下位区分された（I・1～I・6 および II・1～II・6）。2 つの話題は、I が「電車で山に出かけた」、II が「岡澤に車をあげる」と名付けられるものであった。いずれも Y から始発された話題（I・1 および II・1）であった。会話の展開としては、Y から始発された話題内容を確認、共有し、その後、A が話題の細部あるいは関連、派生する情報について Y に尋ねて Y が応えることで

確定し、共有するというかたちであった。話題ユニット I と II のいずれにおいても、Y から始発された話題について確定、共有することにより多くのやりとり（38 回～171 回）を要し、A から始発された話題については比較的速やかに話題が確定されるか、あるいは十分に共有されないままに次の話題に展開していた。ここで要したやりとりは、3 回から 26 回であった。ここからは、Y が、他者からの質問に対して応えることは比較的容易であるが、自分が考えている話題を他者に伝え、他者と共有することに大きな困難を抱えていることを改めて理解することができる。一方、Y が始発した話題については、最大で 171 回ものやりとりが重ねられており、ここに、Y が自分の考えていることを伝えるための強い意欲と高い集中とを見ることが出来る。しかし、こうしたやりとりは、Y と A との関係性のもとにおいて実現したものである。Y は、誰に対してもここでのやりとりの内容にあるように力強く伝えるわけではない。Y が話題を A に強く伝えようとすることは、これまでに A との間で Y が自分の考えが共有される経験を蓄積してきたからこそ実現したものといえる。川住・石川（2000）は、周囲からの係わりに対しては喜ぶものの自らが周囲に働きかけることの少ない重度肢体不自由を主とする重複障害児への教育支援をコミュニケーションの観点から考察し、そのなかで対象児のコミュニケーション意欲を促進した要因として、簡単な音声伝達装置の導入と普段から「会話」の時間を重視して対象児から出される話題に十分な時間を掛けて耳を傾けてきたことを挙げている。本研究における Y との経過からも、コミュニケーション意欲は係わり手との関係性に基づくものであることが示唆されよう。

2 やりとりが展開し、話題が共有化される様相

Y とのやりとりは、Y が始発する話題を確定したり、A が音声言語で尋ねることに対して Y が表情や身振りなどの動作や発声で応えることで行なわれるものであった。Y の始発／応答行動の多くは、わずかな視線や顔の動き、表情変化など、極めて微細なものであった。しかしながら、行動が微細であること自体は、やりとりの展開においてさほど大きな困難とはならない。Table1 のやりとりの内容は、そうした微細な行動が Y の意思表示を示しているものとして特定することができてさえいれば、やりとりが

十分に継続することを示している。係わり手には、Yの行動の微細さととらわれるのではなく、微細ではあるが確実なYの行動が、やりとりのどのような文脈において発現しているかを、係わり手の言動を含めた周囲の環境との関連のなかで絶えず問い直しつつ、係わり合いを進めていくことが求められよう。

また、Yの顔や頭、腕の動き、表情変化は、不随意運動としてのみとらえられてしまうことがある。しかし、こうしたYの行動をやりとりの展開、文脈の流れに位置付けて捉えなおしてみると、明確なYの意思表示であることがTable1のやりとりの内容から読み取ることができる。確かにYのこうした行動

Table1 会話場面のやりとりに関するトランスクリプト

話題ユニット	時間経過 (分：秒)	やりとりの内容	やりとり の回数	話題始発 の方向性	話題の 共有
	0:00	(1)A:「で、Yくん、どこに行っただんですか、この前」(2)Y:「右後方に顔が向く」(3)A:「お母さんで行ったんですか?」(4)Y:「顔は下を向いたまま、口元がニヤッとする」(5)A:「お母さんで行ったの?」(6)Y:「顔を上げて、ニヤッと微笑む」(7)A:「/車で?」(8)Y:「顔を僅かに左右に動かす」(9)A:「/あ、違うの?」(10)Y:「/ゆっくりと顔を僅かに前に傾ける」(11)A:「家ですか」(12)Y:「顔を上げたまま僅かに左右にゆっくり動かす」(13)A:「/違うの?あ、車いす/押して/行ってもらって、歩いていったんですか?」(14)Y:「/左手を挙上しながら笑顔で口を大きく数回、開閉する」(15)A:「歩いて...、じゃあ家の近くですか?」(16)Y:「顔が左側を向く」(17)A:「/このへん?」(18)Y:「/視線が右側を向く」(19)A:「/西多賀?」(20)Y:「/視線を僅かに反らすように動かす」(21)A:「/違う?」(22)Y:「/ニヤッと微笑む」(23)A:「お母さんに押してもらって、散歩に行っただんですか?」(24)Y:「/視線がやや下を向いて、静止する」(25)A:「ただ散歩に行っただんじゃないんだ?」(26)Y:「顔をあげて、微笑みながら」(27)A:「どこ行っただん?仙台...街中とか?」(28)Y:「顔を上を向いたまま左右に僅かに動かす」(29)A:「海とか山とか?」(30)Y:「顔が下がって視線がAに向き、微笑む」(31)A:「山?」(32)Y:「/左手が挙がり、Aに視線を向けながら、口を開閉し、舌が数回、出入りする」(33)A:「山ですか?」(34)Y:「Aに視線が向いた後、右側に顔を向ける」(35)A:「山に行っただんですか?」(36)Y:「Aに視線を向けたまま、舌が数回出入りする」(37)A:「スキー?」(38)Y:「Aに視線を向けたまま、舌が数回出入りする」(39)A:「雪降ってる、振ってました?」(40)Y:「/口が大きく開いて笑顔になり、顔を上を向いて」(41)A:「あ、雪降って、蔵王とかですか?」(42)Y:「Aに視線を向け、僅かに顔を左を向く」(43)A:「蔵王とか...」(44)Y:「Aに視線を向けずに、澄ました表情」(45)A:「近くで...泉ヶ岳とか」(46)Y:「/一瞬、微笑んだ後に、顔が下を向いて、左側に僅かに動く」(47)A:「山、でも山に行っただんですか?」(48)Y:「Aに視線を向いた後、僅かに視線が下に向く」	48	Y→A	+
	1:30	(49)A:「山までは車で行っただんしょう?」(50)Y:「顔を上げて、顔がごく僅かに数回、右方向に動く」(51)A:「/違うの?」(52)Y:「/頭を僅かに下げて、微笑む」(53)A:「/車いすずっと押して行っただん?」(54)Y:「顔を上げて僅かに左右に動かす」(55)A:「あ、バスっていうこと?」(56)Y:「Aに視線を向け僅かに左右に動かす」(57)A:「/みんなで行っただんですか?」(58)Y:「Aに視線を向け、舌を突き出し、左手を挙上する」(59)A:「あ、電車に乗って乗って行っただんですか?」(60)Y:「顔をやや上に向け」(61)A:「/地下鉄?」(62)Y:「/視線を僅かに左右に動かす」(63)A:「/普通の電車?」(64)Y:「/うなづくように僅かに顔を下に向ける」(65)A:「/地下鉄」(66)Y:「/顔を挙げたまま」(67)A:「へえー。電車で、どこに行っただんかな?白石とか」(68)Y:「Aに視線を向けたまま僅かに左右に動かす」(69)A:「えーっと、栗駒とか」(70)Y:「同じように僅かに顔を左右に動かす」(71)A:「電車で行っただん?」(72)Y:「/僅かに視線を下に向ける」(73)A:「山に?」(74)Y:「/Aを見ながら微笑む」	26	A→Y	+
	2:15	(75)A:「へー、どこかに泊ってきたんですか?」(76)Y:「Aの声掛けに合わせて顔を挙げて、微笑みながら顔を僅かに左右に動かす」(77)A:「泊ってはない?」(78)Y:「/僅かに視線を下に向ける」(79)A:「/その日のうちに、/帰ってきた?」(80)Y:「/微笑みながらAに視線を向けて僅かに数回うなづく」(81)A:「/日帰り」(82)Y:「/笑顔で顔を挙げて」(83)A:「/あー」というやや大きな声を出す(84)Y:「/顔を上に挙げたまま口元を僅かに開閉する」(85)A:「/日帰り。へー日帰りで行って来たんだらう?」(86)Y:「Aを注視しつつ、一回大きな息を吐く」	12	A→Y	+
	2:42	(87)A:「/日帰り、あとは山に行って...何してきたんですか?」(88)Y:「/下を向いたまま静止」(89)A:「/散歩?」(90)Y:「/口元を少し動かしながら顔を挙げる」(91)A:「/雪いっぱい降ってました?」(92)Y:「/再度、顔が挙がって笑顔になる」(93)A:「/雪いっぱい降ってたから車いすで行ったら」(94)Y:「/あにゃあ」Aに視線を向けた後に、一瞬、右後方に僅かに顔が向く(95)A:「あ、お母さんが押してくれたの?」(96)Y:「Aを注視し、顔が僅かに下方に動く」(97)A:「/そりゃYくんは押してもらっているから」(98)Y:「/右手前の方に顔が向く」(99)A:「/自分で/これで/運転していけば」(100)Y:「/上体を大きく反らしながら笑顔で」(「あにゃあ」)	14	A→Y	-
	3:13	(101)A:「へえ、お母さんとそれは二人で行っただんですか?」(102)Y:「/顔が上を向いたまま」(103)A:「/二人?」(104)Y:「/僅かにうなづく」(105)A:「/お父さん/とかは?」(106)Y:「/微笑みながら僅かに顔を左右に振る」(107)A:「/行かなかったんですか?」(108)Y:「/僅かにうなづく」(109)A:「/お母さんと/二人/で?」(110)Y:「/満面の笑顔で」(「あにゃあ」)	10	A→Y	+
	3:28	(111)A:「へえ、いいですねえ...温泉とかは入ら/なかった」(112)Y:「/うなづき加減でAを注視する」(113)A:「/何でYくん、お母さんと温泉...」	3	A→Y	-

3:44 (114)Y: /俯いていた顔を挙げて右前方に視線を送る/(115)A:「温泉とかは入ったりしないの?」(116)Y: /右前方を数秒間注視した後にAに視線を向ける。再度、右前方に視線を送る。Aに顔、視線を向ける。これを2回繰り返す/(117)A:「外?」(118)Y: /Aを注視する/(119)A:「病院の外?」(120)Y: /Aを注視しながら僅かにうなづく/(121)A:「外に行きますか/これ(車いす)で?」/(122)Y: /Aを注視しながら僅かに視線を反らした後に、一旦頭が下がって、再度、右側奥に視線を送る/(123)A:「/外に行きたい?」(124)Y: /僅かに視線を反らす/(125)A:「椅子に座る?」(126)Y: うなづき加減で顔を僅かに振る(127)A「車いすをこっちにかけたん?」(128)Y: /険しい表情で右奥方向を向く。その方向に顎を挙げて、舌を出す。その後、再度、右奥の方向を注視する/(129)A:「お母さん?」(130)Y: /同じ方向を向いたまま、僅かに視線を反らす。その後、右側奥に視線を送る/(131)A:「外に行く?」(132)Y: /険しい表情のまま、一旦、Aの顔を見た後に、右側奥に視線を送る/(133)A:「それとも/これ(車いす)/出発するってということ?」(134)Y: /険しい表情で前方右側奥方向を見つめる。その後、顔を僅かに左右に動かす/(135)A:「/違う?」/(136)Y: /うなづき、再度、右奥の方に視線を送る/(137)A:「/二階...いまYくんさ、見てる方向関係ありますか?」(138)Y: /僅かにうなづいた後、再び前方右奥の方向をじっと見る/(139)A:「外?」(140)Y: /僅かにうなづく/(141)A:「玄関?」(142)Y: /僅かに視線を反らす/(143)A:「玄関?」(144)Y: /ややはっきりと顔を左右に振る/(145)A:「/違う?」/(146)Y: /うなづく/(147)A:「雪のこと?」(148)Y: /顔を左右に振る/(149)A:「車のこと?」(150)Y: /上体を起こして、口を開閉し、左手を挙上する/(151)A:「車?」(152)Y: /うなづく/(153)A:「車に行きたい?」(154)Y: /Aに視線を向けたまま静止/(155)A:「ああ、車で行ったんだってことですか?」(156)Y: /Aに視線を向けたまま、ごく僅かに視線が逸れる/(157)A:「違う。/岡澤さん/の車?」(158)Y: /僅かに視線を逸らす/(159)A:「/Yくん/の車?」(160)Y: /ごくわずかにうなづく/(161)A:「誰の車でも行ける?」(162)Y: /Aに視線を向けたまま静止/(163)A:「車を/見たい?」(164)Y: /Aに視線を向けたまま静止。その後、前方右奥に視線が向く/(165)A:「Yくん、その土日に出かけた話と関係ある?」(166)Y: /Aに視線を向けて僅かに顔を左右に動かす/(167)A:「もう関係/ない/の?」(168)Y: /Aをじっと見て僅かに視線を下に向ける/(169)A:「もう関係/ない/んですか?」(170)Y: /Aをじっと見つめてうなづく/(171)A:「あ、何...岡澤さんの車?」(172)Y: /僅かに顔を左右に振る/(173)A:「/Yくん/のお母さんの車ですか?」(174)Y: /Aをじっと見ながら軽く口が開く/(175)A:「お母さんの車?」(176)Y: /顔を挙げて、微笑みながら再度口が開く/(177)A:「ああ、ああ、お母さんの車が?」(178)Y: /微笑む/(179)A:「雪で滑ったの?」(180)Y: /微笑みがなくなり、静止する/(181)A:「故障しないかな?」(182)Y: /Aに視線を向けて静止/(183)A:「車が故障した?」(184)Y: /Aを注視する/(185)A:「心配?」(186)Y: /顔を僅かに左右に振る/(187)A:「車でどこかに行った?」(188)Y: /顔を僅かに振る。前方右方向に数回視線を向ける/(189)A:「車で?」(190)Y: /右前方に視線を向けたまま/(191)A:「車いす?」(192)Y: /一旦、Aに視線を向けて、再度、右前方に視線を顔を向ける/(193)A:「車...」(194)Y: /一旦、顔を下げ、その後、大きく再び右前方に顔を向ける/(195)A:「今日どこか出かけるんですか?」(196)Y: /Aに視線を向ける/(197)A:「違う?」(198)Y: /うなづく/(199)A:「何?車がどうしたんですか?」(200)Y: /Aをじっと注視する/(201)A:「車...Yくんのお母さんの車ですか?」(202)Y: /顔を挙げて微笑み、うなづく/(203)A:「お母さんの車?」(204)Y: /うなづく/(205)A:「お母さんの車がどうしたんですか?」(206)Y: /前方右方向に顔を向ける/(207)A:「見に行ってみる?」(208)Y: /顔を僅かに左右に振る/(209)A:「行か/なく/ていい?」(210)Y: /うなづく/(211)A:「寒いから?」(212)Y: /微笑みながら顔を僅かに左右に振る/(213)A:「雪降ってるから?」(214)Y: /微笑みながら、前方右方向に顔を向ける/(215)A:「お母さんの車...が?」(216)Y: /Aをじっと見つめる/(217)A:「何、新しくなったの?」(218)Y: /顔が上がり、Aを再度、注視する。口元が僅かに動く/(219)A:「新しくなったの?」(220)Y: /Aをじっと注視し、左腕が僅かに上方向に動く/(221)A:「車が変ったの?」(222)Y: /Aを注視する/(223)A:「そういう話ではない?」(224)Y: /ごくわずかに視線を逸らす/(225)A:「車買ったよ?」(226)Y: /Aを注視する/(227)A:「新しい車買ったの?」(228)Y: /Aを注視する。表情に力が入る/(229)A:「買ったの?新しい車?」(230)Y: /Aを注視する。左腕が上下にゆっくり動く/(231)A:「お母さんが?」(232)Y: /Aを注視する。表情が険しい/(233)A:「別な車で来たの?」(234)Y: /Aを注視する/(235)A:「違う?」(236)Y: /Aを注視しながら、右前方に数回、視線を送る/(237)A:「お母さんの車...岡澤さんが運転するの?」(238)Y: /繰り返して、右前方に視線を送る/(239)A:「近くに停めているの?そこに停まっているよっていうこと?」(240)Y: /視線が上を向く/(241)A:「お母さんが車で来なかったっていうこと?」(242)Y: /Aに視線を向けて僅かに数回左右に動かす/(243)A: (数秒間の沈黙の後)「大事な話?」(244)Y: /顔をあげて微笑み、うなづく/(245)A:「大事な話?」(246)Y: /上体を起こして顔を上に向け/「あぁーい」(247)A:「大事な話」(248)Y: /笑顔で/「あぁーい」(249)A:「お母さんの車、岡澤さんにくれるの?」(250)Y: /即座にAに視線を向けてうなづく/(251)A:「えっ、くれるの?」(252)Y: /上体を大きく起こして、顔を上に向けながら/「あぁーい」(253)A:「え、なんで?ほんとにですか、それ?」(254)Y: /Aを注視しながら口を開閉する/(255)A:「下取りに出すとか?」(256)Y: /Aをじっと注視する/(257)A:「岡澤さんに、/くれる/の?車を?」(258)Y: /Aを注視して、口を開閉して、僅かにうなづく/(259)A:「何の話だろう?Yくん?」(260)Y: /大きく笑い、顔を上に向けながら/「いあっ」(261)A:「え?立派な車でしょ?」(262)Y: /上を向いて笑いながら顔を左右に振る/(263)A:「もう立派じゃないの?」(264)Y: /まだ大きく笑いながら/「あいつ」(265)A:「立派じゃないんですか?」(266)Y: /大きく笑いながら/「あいつ」(267)A:「立派...」(268)Y: /上を向いて大きく笑う/

		(269)A: 「立派じゃない...それ廃車にするんですか？」(270)Y: ／即座に笑顔がおさまってAを向いて、注視し、僅かにうなづく／(271)A: 「廃車にする？」(272)Y: ／Aに視線を向けながら、口を開閉する／(273)A: 「新しい車買うんですか？」(274)Y: ／Aをじっと見て口元に力が入る／(275)A: 「新しい車？」(276)Y: ／右側に顔が向く／(277)A: 「Yくんのってあれでしょ？大きい車でしょ？パンみたいな」(278)Y: ／Aを見て微笑む／(279)A: 「ねえ？」(280)Y: ／Aを見て微笑む／(281)A: 「へえ...それをもらわなかったこと、岡澤さんが？」(282)Y: 「あいっ」(283)A: 「お母さんに話聞いてみないとね」(284)Y: ／上を向いて大きく笑う／「あーい」			
II・2	10:43	(285)A: 「岡澤さんも車持ってるんだけど...大きい方がいいか。岡澤さんの車ちっちゃい車だから」(286)Y: ／微笑む／(287)A: 「Yくんちの車はおっきいですよね」(288)Y: ／Aを注視し、微笑む／(289)A: 「ちっちゃいの？」(290)Y: ／顔を左右に数回動かす／(291)A: 「おっきいでしょ？Yくんの車いするくらいだから」(292)Y: ／Aを注視する／	8	A→Y	+
II・3	11:09	(293)A: 「もらっていいの？」(294)Y: ／微笑んでいる／(295)A: 「うっそう？」(296)Y: ／顔を右後ろ方向に繰り返し5回向ける／(297)A: 「へえ、もらっちゃおうかな。(お母さんに)言えて？」(298)Y: ／大きく笑う／(299)A: 「もらっていいの？」(300)Y: ／大きく笑っている／(ここから、Yと同じ施設で生活しているRさん(以下、「R」と略記する)が会話に加わる)(301)A: 「(Rに対して)Rさん、Yくんがね、お母さんの車を岡澤さんにくれるんだって」(302)R: 「あ？」(303)Y: ／ここで再度大きく笑う／(304)A: 「お母さんの車を岡澤さんにくれるんだって」(305)R: 「(Yに向かって)ほんと？...ほんと？」(306)Y: ／上肢をあげながら／「ああい」(307)A: 「もらっちゃおうかな、岡澤さんの車ちっちゃいしあ」(308)Y: ／微笑んでいる／(309)A: 「もらおうかな、Yくん、前から言ってたんですか？いまいついったの？」(310)Y: ／顔を僅かに左右に動かす／(311)A: 「いまいついったの？」(312)Y: ／僅かにうなづく／(313)A: 「そんな思い付きではだめですよ」(314)Y: ／まっすぐの方向をじっと見る／(315)A: 「え、でも新しい車買う予定なんですか？」(316)Y: ／Aの方を向いたまま、口元にやや力がこもる／(317)A: 「そういう予定はないの？」(318)Y: ／Aを注視する／(319)A: 「そうした方がいいなあって、Yくんが思っていることですか？」(320)Y: ／Aを注視しながらごく僅かに視線が左右に動く／(321)A: 「違う？」(322)Y: ／ごく僅かに視線が下を向く／(323)A: 「ほんとにそう言ったの？」(324)Y: ／微笑み、口が一度大きく開き、その後、口が小さく数回閉開し、右腕は挙上する／(325)A: 「岡澤さんに車くれるって？」(326)Y: ／右後ろ方向に顔を向ける／(327)A: 「ほんとに？」(328)Y: ／Aを注視して僅かにうなづく。微笑み／(329)A: 「ほんと」(330)Y: ／顔を上げて大きく笑う／	38	Y→A	+
II・4	14:22	(331)A: 「何だっけYくんの家の車のメーカー、日産？」(332)Y: ／視線を僅かに左右に数回動かす／(333)A: 「ホンダ？」(334)Y: ／視線を僅かに左右に数回動かす／(335)A: 「トヨタ？」(336)Y: ／顔を左右に大きく振る／(337)R: 「マツダ？」(338)Y: ／Rを注視して、右腕が上がりながら／「ああい」(339)A: 「マツダ？」(340)Y: 「あいっ」(341)A: 「マツダの車？」(342)Y: 「あいっ」(343)A: 「マツダのデミオ？」(344)Y: ／視線を僅かに左右に動かす／(345)A: 「マツダの車あんまり知らないなあ。ファミリアとか？」(346)Y: 「あいっ」と発しながら／口元に力が入りながらAを注視する／(347)A: 「ファミリア？」(348)Y: 「あいっ」(349)A: 「マツダのファミリア？」(350)Y: 「あいっ」(351)A: 「あのワゴンタイプのやつ？」(352)Y: ／僅かにうなづく／(353)A: 「マツダのファミリア、ワゴンタイプだった」(354)Y: ／大きく微笑んでいる／	24	A→Y	+
II・5	15:22	(355)A: 「それは何万キロくらい走ってるっけ、たくさん走ってる？」(356)Y: 「あいっ」(357)A: 「でも5万キロくらい。5万キロよりも走った？」(358)Y: 「あいっ」(359)A: 「10万キロ走った？」(360)Y: ／Aの顔をじっと見る／(361)A: 「走ってないの？」(362)Y: ／僅かにうなづく／(363)A: 「6万キロ走った？」(364)Y: 「あーい」(365)A: 「7万キロは？」(366)Y: ／顔を挙げて、一回うなづく／(367)A: 走った。8万キロは？(368)Y: ／僅かに視線を逸らす／「あーい」(369)A: 「走ってない。7万何千キロ？」(370)Y: ／Aを注視する／(371)A: 「7万何千キロっていうこと？」(372)Y: ／僅かにうなづく／(373)A: 「普通車だと10万キロくらい」(374)Y: ／下を向いて微笑む／	20	A→Y	-
II・6	16:13	(375)A: 「どうしょっかな？」(376)Y: ／顔が上に向けて大きく笑う／(377)A: 「岡澤さんもおっきい車乗りたくないあ」(378)Y: ／Aを注視する。左側に顔が向いた後に、右後方に向く／(379)A: 「急な話でちよっとびっくりしたなあ」	5	A→Y	-
	17:20				
	23:40	その後、会話は終了し、散歩を再開する			

が他の行動に不随意に随伴する動きであることもあ
るが、この場合は、他の行動がYの意思表示を明確
に表しており、峻別することは容易である。

また、Yとのやりとりを展開するためには、自成
信号の読み取りが欠かせない。例えば、話題ユニ
ットI・1の(23)から(26)のやりとりにおいては、
Aが尋ねたことに対して、Yは、肯定とも否定とも
とれないような表情をする(25)。そこでAがその

ことを尋ねると、Yが顔をあげて微笑みながら、発
声した(26)。また、話題ユニットII・1の(217)
から(230)のやりとりにおいては、「車が新しく
なった」「車が変わった」「車を買った」というA
からの問い掛けに対して、やはり肯定とも否定とも
とれない表情をする。この時点では、Yがこうした
表情を見せた理由はわからなかったが、その後のや
りとりにおいて、「これから新しい車を買う予定」

であることが理由であることが明らかになった。我々は、尋ねられたことに対して、全て明確に肯定か否定かで応えられるものではない。むしろ、その中間に位置づけられるような応答が多いであろう。Yとのやりとりにおいては、そのことを示すYの表情を自成信号として読み取り、適切に対応していくことが、やりとりの展開およびYとAとの間のいっそうの肯定的な関係性の形成には必要であろう。

そして、YとAとのやりとりにおいては、話題が確定し、共有された直後に、Yの大きな情動表出があることが多い。こうした様子からは、そのことで何か要求が実現したというのではなく、情報とその背景にある感情とが共有されること自体がYにとって非常に嬉しい経験であることが推察される。

IV 総合考察

重度の肢体不自由を抱え、音声言語発信が困難な人が多大な不全感を抱えながら生活しているであろうことは想像に難くない。しかしながら、その不全感の中身たるやこうした困難を抱えたことのない人にとって想像をはるかに越えるものではないだろうか。本研究の結果は、そのことの一端を示唆するものであった。

また、こうした条件を抱える人と係わる人にとっても感じる不全感は非常に大きい。梅津(1978)は、「ある生体の生命過程において、現におこっている“とまどい”、“つまづき”、“とどこおり”」を「障害」とし、「ふつう“障害者”といわれる人々に現におこっている障害状況、そしてその障害状況に対面相触しているわれわれ自身に、それにどう対処したらよいか、“とまどい”、“つまづき”“とどこおり”がおこっていると。これも障害状況である。このような相互障害状況が仕事の出発点、すなわち目標の対象となる」と述べている。係わり手は、自らの障害状況から立ち直るべく、係わり方を改め、工夫や対処を重ねていく。障害状況を構成する条件を、相手となる人の状態像や条件に還元するのではなく、自らのあり方のなかに見出していくのである。本研究で取り上げた会話場面もそうした試みであったともいえる。

近年、コミュニケーションの形成・促進に関して、種々のテクノロジーを活用した機器やコミュニケーションエイドなどが開発され(安藤・大貝・太田・奥・笠井・河田・鈴木・立目・中邑・福島・山田、

1998)、肢体不自由者の微細な発信を増幅あるいは他の手段に置き換えて発信することやある運動機能を代替することが学校や療育機関など様々な場で取り組まれている。こうした拡大・代替コミュニケーションを用いて積極的なコミュニケーションが展開されることは当事者の生活の質を格段に高めるであろう。しかし、こうした手段が習得されないとコミュニケーションが成立しないように見られてしまったり、あるいは、係わり手が相手となる人をよく見ずにコミュニケーション手段を求めることに奔走してしまったりすることがあるように思われる。こうした発想の背景にあるのは、コミュニケーションの伝達効率への希求ではないだろうか。確かに、コミュニケーションのなかに適切な信号が導入され、ストレス少なく自分の考えが伝達できることは重要である。しかし、そこではまず、相手となる人の想いや考えを共有しようとする係わり手がいなければならないのではないか。そのことなくして信号が導入されても有効には機能し難いと思われる。YとAとのやりとりにおいては、伝達効率は悪くとも、お互いに集中したやりとりが展開し、その結果として話題が共有されたときの喜びもいっそうであった。

付記

その後、Yとは、ひらがな文字によるコミュニケーションの学習に取り組んでいる。ひらがな文字がYとのコミュニケーション関係およびYの行動調整に強く関与するまではまだしばらく時間が掛かりそうである。しかしながら、学習に取り組むYの姿は、生涯学習のあり方についてAに教えてくれるものである。

謝辞

本研究の対象となられたYさんおよび筆者の係わり合いを温かく見守ってくださった施設職員の皆様に心より感謝申し上げます。

文献

安藤忠・大貝茂・太田茂・奥英久・笠井新一郎・河田正興・鈴木啓・立目章・中邑賢龍・福島勇・山田弘幸(1998) 子どものための AAC 入門—文字盤からコンピューターへ—。共同医書出版社。
細淵富夫(1996) 重度・重複障害児のコミュニケーション研究をめぐる諸問題 乳児研究からのアブ

- ローチ．障害者問題研究, 23, 4, 31-38.
- 川住隆一・石川政孝 (2000) コミュニケーションの意欲と伝達手段の向上を目指した重複障害児に対する教育支援の経過．国立特殊教育総合研究所研究紀要, 27, 55-66.
- 木村幸子 (1973a) 重度脳性麻痺児における言語行動形成の試み．心理学研究, 44 (2), 97-107.
- 木村幸子 (1973b) 重度脳性麻痺児 (者) における交信行動—その障害と機能形成の試み．聴覚言語障害, 2 (2), 78-88.
- 文部省 (1992) 肢体不自由児のコミュニケーションの指導．日本肢体不自由児協会.
- 元木哲也 (1992) 情報発信手段の乏しい脳性まひ児のコミュニケーション指導—トーキングエイド活用に至るまでの一考察—, 特殊教育学研究, 29 (4), 111-117.
- 須賀哲夫 (1968) ある重い脳性麻痺児の行動発達経過について．群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編, 18, 125-146.
- 土谷良巳 (2009) 先天性盲ろうの子どものコミュニケーションにおける係わり手との関係性—接近・回避の文脈に視点を置いた弱視難聴二事例による考察—, 上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要, 15, 15-21.
- 梅津八三 (1978) 各種障害事例における自成信号系活動の促進と構成信号系活動の形成に関する研究—とくに盲ろう二重障害事例について—, 教育心理学年報, 17, 101-104.
- Wold, E (1999) トータル・コミュニケーションと構造化．平成9年度特殊教育普及セミナー報告書 障害がある子どもの意思の表出と教育環境．国立特殊教育総合研究所, 25-38.